

黒田チカ資料目録

お茶の水女子大学 ジェンダー研究センター

黒田チカ資料目録

お茶の水女子大学 ジェンダー研究センター
2000(平成12)年3月



序

本書は、日本の先駆的女性自然科学者の一人であり、20世紀前半に活躍した化学者黒田チカ(1884～1968)の資料目録である。黒田はお茶の水女子大学の前身である女子高等師範学校(1909年より東京女子高等師範学校と改称、以下東京女高師と略)を1906年に卒業後、同校研究科を修了して1909年東京女高師の助教授に就任した。1913年にわが国で初めて女子にも門戸を開いた東北帝国大学(以下東北帝大)に合格を許可された3人の女子学生の1人となり、1916年に同大学を卒業して日本最初の女性理学士となった。東北帝大有機化学講座の眞島利行教授の指導の下で、大学3年次の卒業研究として紫根の色素の構造研究を始めたことが、黒田の生涯にわたる天然色素研究の端緒となった。その後1916年から2年間東北帝大副手をつとめ、1918年東京女高師の教授に就任した。

1923年8月、2年間の英国留学を終えて帰国したが、同年9月1日の関東大震災で東京女高師の校舎は全滅した。それを契機に、黒田の研究は、新設の理化学研究所眞島研究室で行われることになったのは幸運であった。ここで最初に行なった紅花の色素カーサミンの構造研究により、1929年に東北帝大より理学博士の学位を受けた。それは日本で2番目の女性理学博士であり、化学の分野では最初であった。その後も身近な植物色素やウニの棘の色素の研究を重ね、玉葱外皮からケルセチンを抽出し高血圧の予防薬として実用化するなど、その成果は60報におよぶ研究論文として遺されている。

黒田の生涯は20を越える自伝的随筆に書かれているように、優れた資質が日本の化学界の曙における恵まれた環境の中で育てられ、紅花の色素のように華やかな大輪の花として開いたといえよう。黒田の輝かしい研究業績は、女子の帝国大学入学に対し文部省が不快感を示した時代に、日本女性の力を強く示すことができたばかりでなく、後に続く女性科学者に大きな励ましを与えている。

2000年3月30日

お茶の水女子大学ジェンダー研究センター長
原ひろ子

資料番号について

『黒田チカ資料目録』をまとめるにあたり、お茶の水女子大学ジェンダー研究センターに保管されている黒田チカ関係の資料を再分類し、資料番号をふり直した。
この目録に載せるアルファベット (Ku) を冠した4桁の数字はその資料番号である。